青山二郎の話

宇野千代

宇野千代

青山二郎の話

中央公論社

青山二郎の話　定価九五〇円

昭和五十五年十一月二十日　初版印刷
昭和五十五年十一月三十日　初版発行

著　者　宇野千代
発行者　高梨　茂
印刷所　三陽社
発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
振替東京二―三四
©一九八〇　検印廃止

青山二郎の話

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

1

青山二郎さんのいまの住居は、渋谷区神宮前二ノ三三ノ一二にある。渋谷から青山の大通りへ出て、表参道の交叉点を右へ曲ると、左側に東郷神社が見える。そこから、ゆるいカーヴにしたがつて、左に曲ると右側に、ちよつと西洋のお城のやうに見える八階建ての、白い大きな建物がある。これが、ビラ・ビアンカと言ふマンションである。始めて聞いたときには、洒落た名前だなア、と思つたが、いまでは格別のことはない。地階が「天壇」と言ふ中華料理屋であるから、すぐ眼につく。その「天壇」の前を右に、ちよつと坂になつた道を下りると、右側がビラ・ビアンカの表玄関入口である。青山さんは六階の六〇五号室に住んでゐる。

青山さんはいまから十三年前、と言ふと、東京オリンピックのあつた昭和三十九

年であるが、それの始まる十月の、ほんの少し前にこのマンションを買つた。青山さんのおくさんである和ちやんが、或る日、新聞広告でこのマンションの写真を見て、「これはどう?」と言つたとき、すぐ見に行つて、一と眼でぱつと決めて了つた。これは青山さんの、何かものを撰択するときの特色で、いつでも、ぱつと決めて了ふ。オリンピックに間に合ふやうにと言ふので、それまで一年ばかりゐたことのある、赤坂の霞町マンションから、一気に引越して来たのである。

ビラ・ビアンカは或る知名な建築家の設計である。青山さんは六階にある二つの区画を、大きい方が二千四百五十万円、小さい方が八百五十万円、合計三千三百万円で買つた。いまになつて聞くと、安い買ひ物のやうに思はれるが、その金額はたぶん、いまの一億何千万円かに当るやうな気がする。まだ、所謂、高級マンションと呼ばれるものが建たない前のことで、ビラ・ビアンカの威容は人眼についた。アメリカやドイツの雑誌にも紹介されたと言ふ。

外廓を見ると、各階層が互ひ違ひに重なつてゐるやうに見えるが、中に這入ると、

その奇抜さはなく、落付いてゐる。内装の殆んど凡てが、青山さんの手になると聞くと、それも当然。畳を散いた部屋も幾つかある。障子もある。一枚ガラスの窓が、西南に広く開いてゐる。窓のそとに広いテラスがある。青山さんはそのテラスに植木屋を入れ、庭にした。

この快適な家の中で、青山さんは一日中、何をして暮してゐるのか。不思議なことであるが、青山さんには、これと言つた仕事はない。いや、仕事と好きなことをするのとの区別がない。この間、青山さんの墓地のある三軒茶屋の正蓮寺へ行つたら、そこの和尚さんが青山さんのことを、「骨董屋をしておいでださうで、」と言つたので、ははア、和尚さんは何かを聞き違へてゐるな、と私は思つた。「骨董屋ではありません。自分の好きなものを買つておいても、持つてゐる中に、人に譲つても惜しくなくなることがあるでせう。また、急に金が必要になつて来て、惜しいと思ふものも、手放したりすることがあるでせう。そのことが、骨董屋をしてるなんて、言はれたりするんでせう。」と私は言つたものである。しかし、青山さんの一

日中の仕事の大部分は、自分の持つてゐる陶器、その他の器物を眺めたり、手入れしたりすることで費される。「おい、こないだ松本で買つた織部の皿を持つて来い。」と言ふと、間髪を入れず、和ちやんはそれを、整理してあるどこかの棚から探し出して持つて来る。

青山さんがさう言ふものを出し入れするたびに、袱紗、箱、仕覆などの整理は和ちやんがする。無言の中にする。格別、面倒とも、忙しいとも思はぬ風でする。青山さんはときどき、それらの陶器の或るものに「時代付け」をすることを、ふいに、殆んど本能的に思ひつく。その対象になるものは、ほんたうに古いものは少く、つい、この頃出来たものの方が多い。「時代付け」と言ふのは、青山さんの新造語かも知れないが、陶器に或る工夫を加へて、その陶器の持つてゐる或る生々しさ、荒荒しさを殺し、何となく時代のついたやうな、雅趣と言ふのか、渋さと言ふのか、さう言ふものを加へることである。

「それは、贋物を作ることではないですか、」と言ふ人があるが、違ふ。自然に加

はる年代の持つ、あの言ひやうのないものを、人の手によつて加へることで、これは青山さんの発見なのか、ほかの人もやつてゐることなのか知らないが、これを私は、陶器の上に加へる青山さんの一種の創作、と解釈する。一時、夢中になつて、同じことをやつてゐたことがある。陶芸家の伊奈久さんの宇佐美の窯場から、いま出来たばかりの茶碗を持つて来て、よく、それに時代付けをしてゐることがあつた。あ、これが、あの同じ茶碗かと、仰天させられたことがある。冗談半分か本心かは分らないが、「青山二郎伊奈久二人展」と言ふやうな展示会をしたい、と話し合つてゐたこともあるくらゐである。

或るとき、ちよつと見てゐると、鍋の中で、紅茶の葉つぱをぐらぐらと煮立ててゐるのを見た。その中に、まだ、ほかのものもいろいろ入れてゐる。その赤黒い液の中へ陶器を浸しておく。それから、電気焜炉の上やガスの火の上で焙る。同じことを幾度も繰返す。そして、ときには紙やすりで、陶器の糸尻や、見込みの上薬（うはぐすり）の上からこすつたりする。これら凡ての作業は、秘密なのかも知れない。煮立て過ぎ

て、また漂白したりする。ときには新しい陶器ではなく、古いもので、とても大切にしてゐたものの上にも、同じ方法を施して、失敗することもある。かう言ふ、ひよつとしたら、単なる思ひつきであるものでも、青山さんにとつては、真剣なのか、冗談なのか、他人の眼には分らない。

一体に、青山さんのしてゐることは、それが本気であつても、面白半分に見える。ひよつとしたら、愉しいことだけしか、しないからかも知れない。何かに規制されてする、義務的にする、と言ふことはないやうに見える。いや、ひよつとしたら、さう言ふことも、青山さんの手にかかると、面白いことをしてゐるやうに、変つて見えるのかも知れない。朝、起きると、テラスの植木に水をやる。バケツに水を汲んでやつたりするのではなく、テラスのどこかに、何か、撒水車のやうな仕掛けがしてあつて、それをひねると、一気に、物凄い勢ひで、シャーッと霧か雨が噴出する。青山さんはびしよびしよになる。冬はシャツで、夏は裸の上に、古ぼけた絣の薩摩上布で作つた甚兵衛を着たりしてゐる。たぶん、この水撒きをしたあとは、ど

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

んなにか、さつぱりした気分になることであらう。

テラスの木々も花も、青山さんの丹精を充分にうける。青山さんは、自分の丹精で何かが育つのが、人一倍、面白いのかも知れない。テラスには大きな、両手で抱えきれないほどの、信楽の甕が二つ、おいてある。これも、庭の景色の中に這入る。六階のテラスにある庭だから、周囲に見える風物は、眼まぐるしいやうであるかも知れないのに、一向に平気である。庭はそれでも、十坪もあるかな。池も掘つてある。金魚もゐる。井戸もあると見えるやうに、石の井桁がおいてある。竹を組んだ蓋もある。一応、庭としての体裁がととのつてゐるのを見ると、人の眼には、青山さんも普通の人かと思はれる。

青山さんは新聞を見る。読むのではなく、見る。本の広告を丹念に見て、印をつける。それを注文する。テレビ番組にも印をつける。青山さんの好きな番組は、NETのモーニングショーであると言ふと、信じない人もある。しかし、現在の青山さんのやうに、じつとしてゐて、自分の身の上に変化のない人は、人の身の上噺に

興味を持つのかも知れない。どうも、分らない。「おい、ぱつと時間が変つたときに見るんだ。ぱつと変つたときだ。」と青山さんは言ふ。毎日のことであるが、一日に一度、必ず時計の時間を合せる。時計は四つか五つある。柱時計と目覚し時計と置き時計と懐中時計がある。ぱつと変つたとき、と言ふのは、テレビの画面に現はれる時間のことで、一分毎に変る。その変つた瞬間をとらへて、時間を知らせるやうに、と和ちやんに言ふのである。一秒の狂ひもないやうにするためである。而も全部の時計を同じやうにして合せなければならないからである。青山さんの時計はよく壊れる。修繕に出すと、「そんなに毎日いぢつてゐては、壊れますよ。」と時計屋が言ふ。かう言ふ話を聞くと、青山さんは普通の人ではなく、一種、変つた人のやうに思はれる。

この話でも分るやうに、青山さんにはどうも、几帳面すぎるところがある。客が来ると、よく、自分でココアを入れて出すのであるが、「ちよつと待つてくれ。旨くなるから、」と言つて、匙でぐるぐる混ぜる。ちやうど、数へて二百回になるま

で混ぜると、旨くなるのだと言ふ。

2

青山さんは明治三十四年の六月一日に、麻布新広尾町一丁目二十四番地に生まれた。天皇陛下と同い齢である。五つ違ひの兄の民吉と、ただ二人の兄弟である。青山さんの生れた家は大地主で、いまの青山から麻布にかけた一帯の土地を持つてゐた。それで、青山と言ふ苗字なのだ、と人が言ふのを聞いたことがある。正確な話かどうか分らないが、それくらゐに広い範囲の土地を持つてゐた、大地主だ、と言ふのであらう。青山さんの一族には、いま、兄の民吉も亡(なくな)つて、民吉の未亡人とその子供が二人ゐるきりである。父母、その他の墓のことを訊くと、「墓詣りはしたことがない。」と言ふ。青山さんのこの態度には反するかも知れないが、私は或る日、ちよつと花を買つて、世田谷三軒茶屋にある正蓮寺へ行つて見た。

道が入り組んでゐて、なかなか見付からない。途中で、十ぺんくらゐ車を停めて訊いた末に、やつと分つた。堂々とした構への寺である。しかし、街中にある寺はどこでも、墓地に当てた地面は狭い。その狭い墓地の中ほどに、「青山家代々の墓」と書いた墓がある。あまり大きな墓ではない。側面を見ると、亀屋喜八、行年七十五歳、妻美喜と書いてある。妻の行年は書いてない。相当に古い墓で、苔と言ふよりも、埃を冠つて、一種、乾いた白茶けた色をしてゐる。花筒にも、線香立てにも、ながい間、人の来た形跡はない。亀屋喜八と言ふのが、青山さんの祖先の名前なのだらうか。没年が書いてないので、そこのところが分らない。青山さんの家は、はじめ、亀屋と言つてゐたのだらうか。これまでに聞いてゐたところによると、青山家の当主は、何れも八郎衛門と言ふので、お父さんも八郎衛門と言つてゐたと言ふことであるが、昭和二十六年に死んだその八郎衛門も、ずつと以前の昭和八年に死んだ妻きん、即ち青山さんのお母さんである人の、名前も見当らない。とにかく、この墓は、あの麻布から青山の方まで持つてゐた、と言はれる大地主の先祖代々の

墓としては、何となく粗末な、一家中に誰も、家名を誇示しようとするもののない、墓に見えた。

すぐ右隣りに、ちよつと大きな、菱形をした扁平石の墓があつて、大きな字で一ぱいに、「青山喜八之墓」と書いてある。明治四十三年五月没、行年七十七歳と書いてある。これが例の、クーデンホーフ・カレルギー伯爵夫人光子の父の墓である、と和尚さんが教へてくれた。光子の話は、いまでは誰でも知つてゐる。しかし、青山さんの祖父と、この青山喜八とが兄弟であつた、と言ふ、思ひもかけないやうな話は、あまり人に知られてゐない。勿論、私も聞いたことがなかつた。光子の息子であるリヒアルト・クーデンホーフが、「パン・ヨーロッパ」とか言ふ運動の創始者で、八九年前、日本へ来たときに、ＮＨＫを通じて、母の祖先の墓へ詣でたい、と言つたとか言ふことである。もし、青山一族の内で、残つてゐる人があつたら、その人にも会ひたい、と言つたときにも、その頃、この一族のただ一人の人とも言はれる筈の青山さんは、墓所のあるこの正蓮寺を教へただけで、会はうとはしなか

つた。遠い国から尋ねて来た、毛色の変つた血族の人、と思ふと、私であつたら、ちよつと会つて見たい、と思つたに違ひない。そして、ながい間の友だちである私にも、かう言ふ面白い話があるんだよ、と言つて、この話も話して聞かせたに違ひない。なぜ、聞かせなかつたのであらう。私はこれを、青山さんの、或る「照れ」の感情である、と解釈する。

ウィーンの社交界で嬌名を馳せたクーデンホーフ光子の名は、パリ製の香水の名前に冠して使はれたほどである、と言ふ話も、私はついこの間、聞いたばかりである。この光子の写真を、これもついこの間、光子の伝記を書いた本の表紙で見た私は、この、類まれなる美女の顔と、それほどではない青山さんの面貌との上に、或る類似を発見して、面白いことに思つたものである。また、その本の口絵に出てゐた青山さんの祖父の顔は、ちやうど、光子と青山さんとの間の類似の上に、或る橋渡しをしてゐるやうに見えたのである。面白いのはそればかりではない。この墓の主である光子の父の青山喜八が、家業として、骨董屋をしてゐたと言ふ話である。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c